

なお小島沢ではやや稀なミチシバ（ハナビガヤ）と普通のタツノヒゲを記録している。序にハネガヤ *Stipa pekinensis* Hance の産地を記憶により挙げれば神奈川県津久井郡相模湖町石老山、山梨県富士吉田市富士山吉田口登山道。

なおコウヤザサは長田武正『日本イネ科植物図譜』によればタケ亜科コウヤザサ連に所属している。名前はササでもササとは大いに異なる種であるが、岡山大学名誉教授の村松幹夫氏はタケノホソクロバと謂う昆虫（鱗翅目マダラガ科の蛾）の幼虫の食性がイネ科タケ連の植物のみの狭い摂食に注目して、広義に見たタケの仲間の植物で産卵・摂食実験を行った。材料はタケ連クロチク、インヨウチク、ヤダケ、メダケ、シホウチク、ホウライチク、イネ連のマコモ、ツクシガヤ、イネ、アフリカイネ、アシカキ、エゾノサヤヌカグサ、タツノヒゲ連タツノヒゲ、タキキビ連タキキビ、コウヤザサ連コウヤザサである。村松先生の実験結果ではタケ連ではホウライチクのみ産卵がないが、摂食ではシホウチク、ホウライチクでは低度のほか全種に認められた。イネ連では摂食は全種にあり、産卵はマコモに低度であった。タツノヒゲ、タキキビ、コウヤザサでは産卵も野外での摂食も全てなく、タツノヒゲ、コウヤザサでは容器内飼育で低度の摂食が認められた（5齢幼虫）。この幼虫は野外で「ササ」の主要3属をよく摂食する、謂わばタケササの害虫であるがイネ科の系統の親近性を検証する新しい手法かもしれない。参照：村松幹夫「第1部第4章 日本列島のタケ連植物の自然誌」、山口裕文編著『栽培植物の自然史 II』北海道大学出版会（2013）、pp.59-93。

[次号に続く]

#### 主要参考文献

- 大井次三郎『日本植物誌 顕花篇（イネ科）』（1963 初版；1973 改訂新版）至文堂
- Stone, Benjamin C. 《The Flora of Guam》Micronesica, Vol. 6 (1970) University of Guam
- 初島住彦『琉球植物誌』（1971 初版；1975 改訂版）沖縄生物教育研究会
- Hsu, Chien-Chang (許建昌)《Taiwan Grasses》(1975) 台湾省教育会(台湾教育月刊社)
- Hsu, Chien-Chang 《Gramineae (Poaceae) 禾本科》in *Flora of Taiwan* Vol. V (1978) 現代関係出版社
- 大井次三郎「イネ科」、『日本の野生植物 I』（1982, 平凡社）収録
- 長田武正『日本イネ科植物図譜』（1989）平凡社（その後8図版追加）
- 初島住彦解説、益村聖作図『琉球産イネ科植物図譜』33 図版、鹿児島植物同好会誌 12-14. (1992/94/95)
- 藤本義昭『兵庫県イネ科植物誌』（1995）藤本植物研究所（静岡市・大村敏朗氏（本会会員）贈呈本）
- 豊田武司『小笠原諸島固有植物ガイド』（2014）ウッズプレス

前号の訂正：図4 シンテンルリミノキはケシンテンルリミノキ *Lasianthus curtisii* King et Gamble に訂正する。図3と比較して葉柄が短いことを不審とし花を精査し、花卉も萼裂片も深裂することで本種と判明した。標本を速く片付けたことが間違いの素であった。お詫びして訂正します。（長谷川義人）

牧野  
ワールド  
を巡る

## 第8回

# 牧野富太郎と食虫植物

練馬区立牧野記念庭園記念館学芸員 伊藤千恵（本会会員）

牧野記念庭園記念館では、この夏、企画展「虫も食べちゃう植物—牧野富太郎もびっくり！—」を開催します。そこで、この機会に調べた牧野富太郎と食虫植物のかかわりについて紹介させていただきます。

牧野富太郎は、1900年（明治33）『植物学雑誌』14（160）に「日本産食虫草ノ種數」（pp. 134-135）と題した記事を発表し、富太郎によって日本での分布が確認されたムジナモやナガバノモウセンゴケなどを含む全17種の食虫植物について報告します。その後も富太郎は、同一種と思われてきたコタヌキモとヒメタヌキモを区分したり、*Drosera Burmanni* Vahl が用いられてきたコモウセンゴケに *D. spathulata* Labill. の学名を当てたりと食虫植物の分類を整理していきます。

現在、日本に自生する食虫植物は、モウセンゴケ科とタヌキモ科に属する22種（次頁の表を参照）で、その他にも花色が違うなど品種レベルの違いがみられるものや2種が交雑した雑種が、数種類あるとされています。富太郎は生涯の中でヒメミカキグサをはじめとする6種について学名の記載を行い、現在でもタヌキモとフサタヌキモが富太郎の記載が有効となっています。

数多くある牧野富太郎の食虫植物に関する業績ですが、やはり忘れてはならないのはムジナモではないでしょうか。富太郎は1890年（明治23）5月11日、小岩村伊予田（現江戸川区）の江戸川河川敷でヤナギの標本を採ろうとした際に水面に浮かぶムジナモを日本で初めて発見します。ムジナモはヨーロッパ、アジア、アフリカに点在して分布し、沼や水田の水路などに生育する水生植物です。貧栄養のきれいな水を好み、根を持たず水面に浮遊し、光合成のほかに水中のミジンコなどのプランクトンを捕えて栄養とします。しかし、当時は、開花が確認されていない謎の植物でした。そんな中、富太郎は1891年（明治24）7月に小岩村でムジナモの開花をスケッチし、精密な植物図を残します。そして1893（明治26）年『植物学雑誌』7（80）で花を含めたムジナモの植物画を発表し、その図がエングレー監修の植物分類学書『Das Pflanzenreich』に転載され、富太郎の名前は世界に知られることとなります。

富太郎の発見後、ムジナモは日本の植物界でも広く知られ、利根川、信濃川、木曾川、淀川などの各水系で次々と見つかります。しかし、大洪水、埋め立て、水質汚濁によって急激に減少し、1966年（昭和41）、台風により宝蔵寺沼（埼玉県羽生市）から流失してしまったことを最後に野生絶滅してしまいま

## 日本に自生する食虫植物と発見・記載における牧野富太郎の貢献

## モウセンゴケ科

## ムジナモ属

ムジナモ *Aldrovanda vesiculosa* L. 日本初発見、和名をつける

## モウセンゴケ属

ナガバノイシモチソウ *Drosera indica* L. 赤花と白花があることを指摘、品種を記載

イシモチソウ *Drosera peltata* Thunb.

モウセンゴケ *Drosera rotundifolia* L.

コモウセンゴケ *Drosera spathulata* Labill. *D. Burmanni* から正しい学名へと整理

ナガバノモウセンゴケ *Drosera anglica* Huds. 日本初発見、和名をつける

トウカイコモウセンゴケ *Drosera tokaiensis*  
(Komiya & C. Shibata) T. Nakam. & K. Ueda

## タヌキモ科

## タヌキモ属

タヌキモ *Utricularia japonica* Makino 牧野富太郎命名植物

オオタヌキモ *Utricularia macrorhiza* Le Conte

コタヌキモ *Utricularia intermedia* Heyne ヒメタヌキモとの混同を整理

ノタヌキモ *Utricularia aurea* Lour. タヌキモとの混同を整理、*U. pilosa* として記載

ヒメタヌキモ *Utricularia minor* L. コタヌキモとの混同を整理

イトタヌキモ *Utricularia exoleta* R. Br. ミカワタヌキモ (*U. nagurae*) として記載

フサタヌキモ *Utricularia dimorphantha* Makino 牧野富太郎命名植物

イヌタヌキモ *Utricularia australis* R. Br.

ヤチコタヌキモ *Utricularia ochroleuca* R. Hartm. 日本最古の標本を採集

ミミカキグサ *Utricularia bifida* L.

ムラサキミミカキグサ *Utricularia uliginosa* Vahl

ホザキノミミカキグサ *Utricularia caerulea* L.

ヒメミミカキグサ *Utricularia minutissima* Vahl 日本初発見、和名をつけ、*U. nipponica* として記載

## ムシトリスミレ属

コウシンソウ *Pinguicula ramosa* Miyoshi

ムシトリスミレ *Pinguicula vulgaris* L.

(学名は米倉浩司・梶田忠による「BG Plants 和名-学名インデックス」(YList) を参照した)

た。現在、「江戸川ムジナモ保存会」と「羽生市ムジナモ保存会」がムジナモを保存する取り組みを行っていて、ムジナモの現状を知るためその活動について取材しました。

「江戸川ムジナモ保存会」では、ムジナモの保全を目的として、保存や繁殖、地域の方々への周知等の活動を行っています。ムジナモ発見の地である小岩菖蒲園のイベント開催にあわせ、ムジナモを生体展示し、多くの方に知ってもらう機会を設けています。訪れる人々の中で野生絶滅したムジナモを知っている人は皆無で、ムジナモを知ってもらう活動の重要性を痛感しました。

「羽生市ムジナモ保存会」では、系統保存されているムジナモの栽培方法を確立し、最後の生育地の宝蔵寺沼へ放流しています。宝蔵寺沼では1965年(昭和40)以降、周囲の埋め立てや大規模な地下水のくみ上げに伴い、湧水が途絶えてしまったことから、流れをつくりムジナモの生育に適した水質に改善する取り組みもあわせて行われています。きれいな水を好み、足りない栄養はミジンコなどを食べることで生きてきたムジナモ。その野生復活のために並々ならない努力がな

されてきました。

今回の取材から、富太郎が水面に浮かんでいるムジナモを見つけた時と同じように、ムジナモを野外で見つける喜びを私もいつか体験してみたいと感じるようになりました。企画展を観た来館者も同じような気持ちになってもらえたらと思います。現在企画展の準備に取り組んでいます。企画展の詳細は本誌16ページをご覧ください。

## 参考文献

小宮定志 (2014) 日本産食虫植物の種数と種名の変遷. 食虫植物研究会々誌 **65** (2): 29-33.

小宮定志 (2010) 日本における食虫植物発見の足跡 (3) ナガバノモウセンゴケと底着沈水生タヌキモ類 3種. 食虫植物研究会々誌 **61** (3): 70-76.

小宮定志 (2011) 日本における食虫植物発見の足跡 (7) イシモチソウとイトタヌキモ. 食虫植物研究会々誌 **62** (4): 102-109.

山本正江・田中伸幸 (2004) 牧野富太郎植物採集行動録 明治・大正篇. 高知県立牧野植物園, 高知.